

## ペルシヤの人々（アイスキュロス）

紀元前五世紀、ペルシヤ戦役の頃の話である。ペルシヤのダレイオス大王は二度に亙りギリシヤに遠征軍を派遣するが、紀元前四百九十年、馬拉トン戦で敗北し、四年後に死亡する。その六年後、息子のクセルクセス王は父王の戒めに背いて第三次ギリシヤ遠征を敢行、サラミスの海戦に於てギリシヤ軍と激突する。

舞臺はペルシヤの首府の王宮の前。長老達が戦局を案じてゐると、ダレイオスの后だつたアトッサが現れ、クセルクセスの凶運きよううんを暗示する不吉な夢を見たと言ふ。そこに使者が登場して、ペルシヤ軍の大敗北の有様を告げる。一日にしてか程の人数が死んだ例しはなく、勇將達は皆屈辱的な最期を遂げ、海邊近くの見晴しのよい丘に坐してゐた王は「底知れぬ敗北の悲惨」を目の邊あたりにして、衣を引裂き、激しい悲嘆に暮れながら、「無惨な退卻」を命じたのだといふ。

長老達は過酷な運命を呪ひつつ、クセルクセスと異りダレイオスがかかる悲運を免れたのはなぜかと問ひ、ダレイオス王の陵墓りやうぼに赴き、ペルシャの「不幸をいやす藥」、「嘆きをいやすお方」を呼び求めて、かう祈る。王は悲惨な戦でもつはもの達を失ふ事無く、巧みな用兵故に「神のごとき知者」と稱へられる「聖王」であられた、「おう、去りし時代の聖王よ、いでたまへ」。すると、ダレイオスの亡霊が陵墓の頂きに現れて、かう語る。自分が國に不幸を招かなかつたのは「わきまへを心の舵とりにしたからだ」。然るに、クセルクセスは「若い考へにおぼれて、わしの訓戒をわすれ」、「はげしい氣性」の赴く儘ギリシャ遠征を思ひ立ち、浮橋を考案して大軍勢を渡す路を作つたが、それは「人間でありながら、愚かしくも、よろずの神々を、とりわけポセイドン（海神）」を支配しようとしたに等しく、さういふ傲慢こそが奴の「心の病」に他ならぬ。今回の悲運は「傲慢にも神を忘れた行ひのむくいだ」、「人間は、傲慢な思ひを抱いてはならぬ。傲慢は花をつけ、破滅の道をみのらせる、みのりの秋はとめどない涙を刈りとるのだ」、さう云つて、クセルクセスを諫めるいさがよい。

史實に基いた作品であり、上演されたのはサラミスの海戦から八年後の事であつて、しかも上演當時、ギリシャは未だペルシャと交戦中で、アテナイ海軍はペルシャ海軍を驅逐くちくしつつかあ

り、アテナイを盟主としてギリシャは正に大隆盛期を迎へんとしてゐたのだが、さういふ時期に、アイスキュロスは勝者たる祖國ギリシャを讃へるのではなく、敗者たる敵國ペルシャの立場に立つて、「わきまへ」の大事を説き、「傲慢」の危険を戒めたのである。アイスキュロスの悲劇の全ては、己れが只の死すべき存在でしかないとの自覺と不安を人間が忘れて、安逸な眠りを貪る事の無い様に、「不安の目をさます役」、「見張り役」たる事を意圖して作られたと、ワインシュトックは名著「ヒューマニズムの悲劇」に書いてゐる。人間には何處迄も「人間の苦しみ」が附纏ふもの、ともダレイオス王は云ふが、人間なるが故の愚行や悲惨にギリシャ人ペルシャ人の別も、無論、日本人の別もない。硫黄島戦の米軍最高指揮官ホーランド・スミス中將は回想録に、日露戦争の勝利後、日本が「アメリカであれ何處であれ、相手になつてやろうといふ様な、身の程知らずの態度」を露はに示すのに驚いた、と記してゐるが、その種の夜郎自大を批判した清澤冽の如き氣骨ある知識人は發言を封殺される事となる。アイスキュロスの昔から、「見張り役」の重要性は何ら變りはしないが、それが殆ど無力でしかないのも、これ又何時の世にも變らない。

(久保正彰譯、「ギリシャ悲劇全集一」、人文書院)